

吉田宗恂とその周辺—コンピュータと図書館を活用して

(4) 本草序例抄に見える人名

島野達雄

1. 翻刻の難しさ

吉田宗恂の『歴代名医伝略』の翻刻（漢字 4 万 5 千字×4 種&読み下し文 15 万 5 千字）および解明には約 5 年の歳月が必要だった。『本草序例抄』7 巻は約半年（2017 年 3 月～8 月）で約 25 万字の入力をほぼ終えたが、内容の解明には、あと数年はかかるだろう。

今回の本草序例抄の入力は、ネットで容易に入手できる国会図書館・白井光太郎旧蔵本（pdf で 514 頁）を底本とした。原文はゴ式カタカナ漢字まじり文が中心で、訓点つき漢文もかなりある。「読みやすく」をモットーとして、漢字は通用字（ユニコードの包摂字体^{●1}）を使用、レ点、一二点などの返り点はクリップボードにあらかじめ用意しておき、必要な箇所には貼り付けた。

入力スピードと読みやすさの上から、カタカナはひらがなで入力した。ワードでは一瞬にして全部カタカナに変更できる。

難漢字の入力は 10 年ほど前に買った「文字鏡」を利用したが、歴代名医伝略のときと同様、5 万字に 1 字程度は文字鏡にも無い漢字があらわれた。

字義字韻については韻会（『古今韻会挙要』）からの引用が 95 か所以上ある（単に「会」とする箇所も多い）。関学図書館で「韻会」「韻會」で検索すると「該当書なし」となり、「古今韻會舉要」または「古今韻會挙要」で検索すると表示される。この古今韻会挙要は平上去入の四声で分類されており、非常に調べにくい。

中身は、正直なところ、わからないことだらけ。歴代名医伝略の経験から、100 の疑問点があれば、半分の 50 はインターネットで見当がつく。残りのうち 25、つまり 4 分の 1 はツテを頼ってその道の達人に教えてもらえる。残りの 25 は、自分で調べるしかない。

以下、入力中に見つけた事柄をとりあえず速報する。

2. 月舟・継天からの引用

さきに、大日本史料 12-7 に天正 14 年の本草序例抄・宗恂自跋が載っていることを紹介した。この跋文中に登場する、東山月舟和尚つまり月舟寿桂（1470-1533）と、截継天つまり継天寿截（1495-1549）の二人の文言が実際に本草序例抄の本文に引用されている。

月舟からの引用は、①巻 3 (pdf29) 羽毛「月舟の義に」、②巻 3 (pdf30) 子母「月舟云」、

●1 ユニコードは無神経にも草と草を区別しない。国語に無知無能な人が定めた。

③巻 4 (pdf10) 壺「月舟の云」、④巻 4 (pdf12) 戴面「月舟云」の 4 か所。旧蔵者の白井博士の（ものと思われる）人名をあらわす朱引きは②③についており、①④には無い。

継天からの引用は⑤巻 4 (pdf36) 銭五七「継天の義に」、⑥巻 5 (pdf38) 雷公炮灸論序「継天の抄に云」、⑦巻 6 (pdf21) 仍「継天の曰」の 3 か所。朱引きは⑤⑥⑦ともに無い。

3. 一栢について

月舟の引用①と対比して⑧巻 3 (pdf29) 羽毛に「一栢の義に」、月舟の引用②に対比して⑨巻 3 (pdf30) 子母に「一栢の説に」とある。加えて⑩巻 7 (pdf4) 夫遊魂に「一栢翁の曰」…「以上の義、一栢之所説也」と一栢なる人物の引用がある。⑨のみ朱引きあり。

月舟と一栢（姓は谷野）との交友は、幻雲文集（続群書類従第 13 輯上）の終りのほうに月舟が一栢に贈った漢詩があることからわかる。

『国書総目録』で調べると、一栢講・月舟聞書・清原宣賢筆の『易学啓蒙通釈口義』を京大が所蔵（重要文化財）し、デジタル画像を公開している。

国立情報学研究所の CiNii Articles [日本の論文をさがす] で「一栢」をキーワードにして検索し、平泉洸「越前国一乗ヶ谷版の医書と一栢老人」藝林 11(2)1980-04 が関学文学部史学科に、鈴木博「医学の抄物二三 一栢・道器・玄朔」国語国文 45(6)1976-06 が関学図書館に、宮川浩也「谷野一栢著『難経抄』所引医書について」日本医史学雑誌 42(2)1996-05 が関学図書館に所蔵されており、すべてコピーをとった。

また、平泉洸「天之図と一栢老人」芸林 42(1)1993-02 は立命館大学に、小曾戸洋・真柳誠「一栢自筆の『難経抄』漢方の臨床 42(8)1995-08 および小曾戸洋・真柳誠「一栢の研究した熊宗立本『内経』古鈔本」漢方の臨床 42(9)1995-09 は福岡大学に、それぞれ関学図書館から複写依頼をしてもらった。福岡大学からは親切なことに「白黒で依頼を受けたがカラーでないと読みにくい」と連絡があった。A4 用紙 4 枚、カラー複写で郵送料をふくめて 440 円也。

平泉洸「天之図と一栢老人」を読むと、佐々木英治という人が『滝谷寺蔵「天之図」の研究 その分析および時代考証と谷野一栢について』という 32 頁の小冊子を 1989 年に自費出版していることがわかった。あいにくこの本は、福井県立図書館しか所蔵していなかったが、佐々木英治氏と旧知の和算ゼミの小寺裕氏から pdf を送ってもらった。滝谷寺にある星図および隋・丹元子の歩天歌が載っている「天之図」は重要文化財に指定されており、文化庁のホームページで概要をうかがえる。

4. 今後の見通し

現在、宗恂の『医方大成論抄』の入力を進めているが、頭書に「東井翁（二代目曲直瀬道三玄朔のこと）曰」や「栢（一栢のこと）云」といった記述が散見される。宗恂につながる室町・安土桃山時代の医学の系譜は、まだまだ調べる必要があるだろう。

本草序例抄には「算」が 8 回登場し、「算用合う也」といった記述もある。

本草序例抄がこれまでほとんど研究対象にならなかった理由は、和漢の、歴史・国語・文学・医学・薬学・易学・暦学・数学といった広い範囲の知識が必要だったからに違いない。いま、ようやく本草序例抄と吉田宗恂の研究を総合的に進める時期が来たように思う。

[PS] 鈴木武雄氏から論文『『割算書』と隠れキリシタン』をいただいた。佐藤賢一氏が仙台藩のキリシタンの家に割算書の写本が伝来したことを「大発見」した、と報じています。